

## 編集手帳

「東海道中膝栗毛」で知られる戯作者、十返舎一九に辞世の狂歌がある。△此世をばドリヤお暇に線香のけむりとなりて灰様なら▽◆人はいつか煙になり、灰になる。人生の無常転変を映すものが灰ならば、その対極にある悠久不変の象徴は何だろう。「永遠の輝きを」という宝飾店の広告に従えば、ダイヤモンドがそうかも知れない◆故人の遺灰を高温・高圧で処理し、人造ダイヤをつくっているスイス企業の記事を、きのうの国際面で読んだ。一人分の遺灰から最大1割のダイヤがで

き、最低価格は80万円ほどという◆日本を含む国内外から月にして約60件の注文があるというから、なかなか繁盛している。亡き人にいつも触れていたい、片ときも離れたくない、という人は多いのだろう◆アンジェイ・ワイタ監督の映画「灰とダイヤモンド」に引用された詩の1節を思い出す。△永遠の勝利の暁に、灰の底深く／燦々たるダイヤモンドの残らんことを▽。人生に「永遠の勝利」は望むべくもないが、「燦々」は望めばかなう時代であるらしい。好みとしては硬い石になるよりも、千の風に心ひかれるけれど。

2008. 9. 5

記事の内容は海外から配信のニュースを基にしていますので日本の事情と違う部分もあります(例:日本の最低価格は40万程から)